

耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-Kouhei.org



皆さん、あけましておめでとうございます。今年もかわら版、よろしく願います。寒い日が続きます。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということなのです。

今年もいろいろ悩み事や判断しなければならぬことがあつて、「どうしようか」「ああしよるか」と葛藤しますね。と言って使った「葛藤」も仏教用語です。

お経にも登場します。「法句経」は「愛結(煩惱)は葛藤の如し」と記し、煩惱を「葛藤」に喩えています。また「出曜経」は「愛綱(愛欲の綱)に墮する者は必ず正道に敗れ究竟に至らず」と説いています。が、「愛綱」は上述の法句経の「愛結」と同じようなことを指しています。要するに「葛藤」の反対語が「正道」であるとも言えます。

葛(くず、かずら)はマメ科のツル性多年草、藤はマメ科のツル性落葉木本です。どちらも、樹木に絡みつくマメ科のツル草で、ほかの木や古い家の壁など

に張りついていてる姿をよく見かけますよね。我が家の庭にもあります。

何だか複雑に絡み合つて、剥がすのが大変そうなのが葛と藤です。ツル草が生い茂つて縛(もつ)れて解けない状態、気持ち悪い状態を「葛藤」という言葉で表現しています。

法句経や出曜経の「愛綱」「愛結」は愛欲だけを指すのではなく、人間の欲つまり煩惱のことです。ツル草は樹に纏わりつき、ついに纏わりついていてる樹を枯死させてしまいます。欲が纏わりついていてる樹とは、すなわち人です。人が欲の葛藤から抜け出せない、最後は自滅してしまうことを論じているのが「葛藤」という言葉です。

ツル草の葛や藤が生い茂り、複雑に纏わりつくと、簡単に剥がしたり、解き放つことができないように、私たちが悩ませる欲や愚痴などの煩惱は容易に断ち切ることはできないことを教えてくれています。思い当たることがいっぱいありますね。禅宗では、意味の解きがたい語句や公案(禅問答)の意味でも使われます。つまり「葛藤」とは文字や言句のみに囚われる

ことの喩えとして用いられる一方、逆説的に文字や文章では表現し切れない覚りの深遠さも示唆しています。そして、「葛藤」を一挙に断ち切るひと言を「葛藤断句」と言います。公案の際に、例えば「生きるとは何ぞや」と問うたのに対して「欲との闘いなり」と「葛藤断句」で応じる、という感じなのです。

「葛藤」は心の中の「欲求の対立」という心理学用語にもなりました。高名な精神分析学者フロイトが使った「(O)C(1)」「(1)C(1)」という言葉が日本に紹介された際、訳語として「葛藤」が当てられました。なお、一般英語としては「対立」「衝突」等の訳語が定着しています。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」夏目漱石の「草枕」の有名な一節です。漱石は心の葛藤を巧みに表現しています。よくわかりますよね。

「生か死か、それが問題だ」というハムレットの有名な台詞も「葛藤」の真骨頂。人間は欲の塊ですから、葛藤するのは当たり前です。ではまた来月。

※



豊田 中日文化センター

仏教にふれて 心穏やかに生きる

「仏教にふれて心穏やかに生きる」の第2弾です。良いこともあれば、悪いこともあるのが人生です。楽しい時もあれば、辛い時もあります。今から2500年前のお釈迦さまに始まった仏教は、私たちに「何か」を教えてくれています。「どこか」に導いてくれています。過去6回も振り返りながら、いくつかの話題からその「何か」と「どこか」を考えます。

第7回 1月14日(日) 13:30-15:00

「葛藤」のない生き方

第8回 2月11日(日) 13:30-15:00

「自業自得」の生き方

第9回 3月10日(日) 13:30-15:00

生きることの「不思議」



※お申し込み・詳細は豊田中日文化センターまでお問合せください。右のQRコードから豊田中日文化センター講座HPが開きます。



大塚耕平事務所 かわら版担当: あさい
TEL 052 757 1955

